

わたりだ

渡田小学校教育目標
やる気いっぱい
笑顔いっぱい
元気いっぱい
川崎市立渡田小学校

2024. 7. 2

100年共に育つ

学校長 楠田 典子

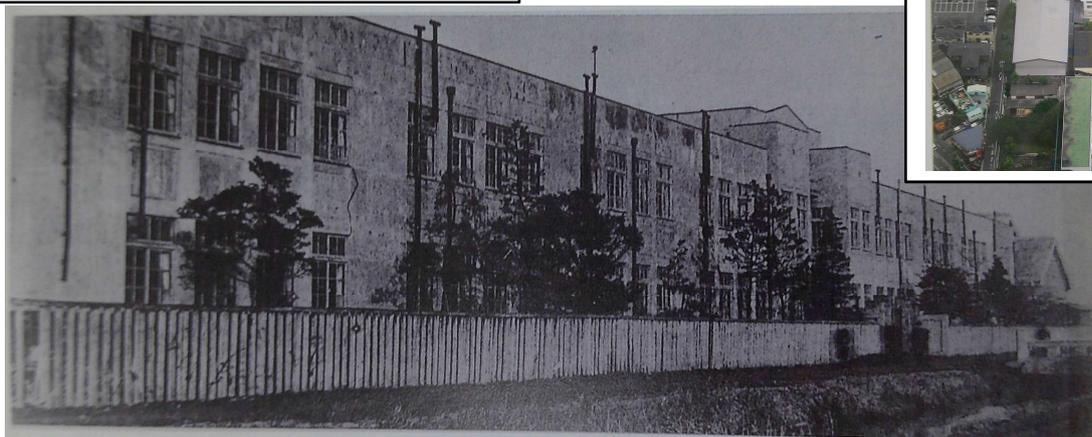
7月1日は、川崎市の市制記念日です。加えて今年2024年は、100回目の大きな節目となる市制記念日を迎えます。身近なところでは、川崎駅のコンコースに、市制100周年を祝う大きな垂れ幕が何枚も下がっているのが目につきます。川崎町が、御幸村・大師町を合併して「町」から「市」となった100年前、つまり1914年（大正13年）当時は、いったいどんな時代だったのでしょうか。

生まれたばかりの川崎市の人口は、約5万人。3町村が合併するきっかけとなった理由は2つあるとされています。（政策情報かわさき vol.42より）一つは上下水道や道路の整備です。明治40年代に工場の誘致に成功した川崎市には、全国から多くの工場労働者が流入してきました。その人々を受け入れるにあたって、都市施設の整備が喫緊の課題であり、これを解決するには一つの町だけではなく、少しでも広い地域の行政としての力が必要という事情があったとされています。二つ目の理由として加わったのは、関東大震災からの復興という課題です。被害を受けた町を復旧させ、町民の暮らしを向上させることは、小規模な町役場にできることではなかったことが合併を推し進めていった理由と考えられています。実は、川崎市だけでなく、現在まで続く様々な施設や制度などのうち、多くのものがこの時期に生まれました。甲子園球場は川崎市と同じ年に誕生していますし、高校野球の甲子園大会や箱根駅伝などが最近100回記念の大会を迎えたのも、記憶に新しいところです。

また、この渡田小学校も今年で創立96年ですので、よく考えてみると関東大震災の傷がまだ癒えない頃に建てられた学校ということになります。当時としては珍しいモルタルづくりの外壁に囲まれた校舎は、「コンクリ（コンクリート）学校」と呼ばれていたようですが（創立90周年記念 地域副読本 「わたりだ」より）、地震に強い校舎を、という当時の人々の願いがそう呼ばせたのかもかもしれません。

そんな歴史を持つ川崎市に育つ現在の子供たちは、川崎市の次の100年をどう作っていくのでしょうか。子どもたちと一緒に育っていく川崎市の未来を語り合うのにも、今年の市制記念日は良い機会かもしれません。

開校当初の校舎の様子(1928年頃)

90周年
校舎と校章(人文字)